

ライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣

医の

カル

テ



66



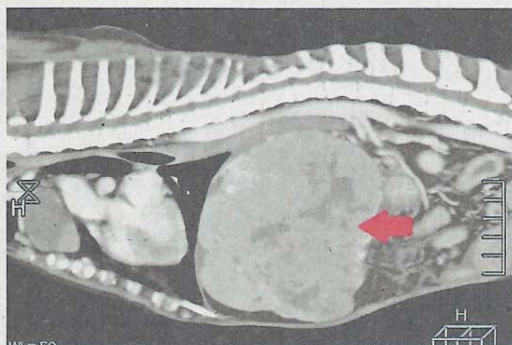
アレス動物
医療センター院長
(高岡市下伏間江)

沖田 将人

「肝臓は沈黙の臓器」と人間の医療で言われますが、それは動物も同じです。肝臓は痛みを感じる神経が発達しておらず、炎症やがんなどができても自覚症状はありません。気づかないうちに悪化してしまうことが多いのです。特に犬や猫など我慢強い生き物は、なかなか症状を見せません。いつものように食事を取り、いつものように元気に走りまわっていても、実は肝臓がんになっていた、ということもあるのです。

肝臓は①食べ物の消化②体に取り入れた栄養の活用③体に入って

肝臓がん



▲ 犬の肝臓腫瘍のCT写真。矢印が腫瘍部分。

きた毒物の解毒という大きな三つの役割を持っています。肝臓とこの言葉があるくらいで、生きる上で最も大切な臓器の一つです。大切なのに病気になることも症状が出ない肝臓は、どうやって異常

を見つけたらよいのでしょうか。実はこれも人間と同じで、最も簡単な方法は健康診断での血液検査です。6歳を過ぎた頃から、できれば年1回は血液検査をして、肝臓の数値が悪化していないか確認し

年1回は血液検査

た方が良いでしょう。犬猫の6歳は人間の40歳くらい。人間でもその頃から定期的な健康診断、血液検査が必要になってきます。

ほとんどの動物病院で肝臓に関する血液検査は受けられるので、勇気をもって主治医に相談しましょう。肝臓の数値に異常がなければ、安心してお世話できます。もし異常があっても、エックス線、

超音波エコー、CTなどの検査を追加で受ければ、かなり初期の肝臓がんでも発見できるような現代の獣医学は進歩しています。初期のがんであれば手術で治せるケースもあります。がんになる前の肝炎、肝硬変などの病気が見つければ、進行しないように対策を練ることも可能です。

大切なことは早期発見・治療です。食欲も元気もあるのだから、特に健康診断はいらないだろうと決めつけるのは危険です。犬は春にフィラリア予防のため血液検査を受けると思いますが、ついでに肝臓の検査をしましょう。猫も年に1回、ワクチンのために動物病院に行くついでに血液検査をしてもらうと良いでしょう。物言わぬ生き物だからこそ、飼い主さんがちょっと心配症になるくらいがちょうど良いのではないのでしょうか。